



令和7年度地域活性化活動発表会 各地で展開する地域活性化活動をサポート

(一財)北海道開発協会 開発調査総合研究所
副参事 中川 俊也

(一財)北海道開発協会では、非営利の市民団体が行う地域活性化活動に対して平成14年度から助成を行っており、これまで160件の活動に支援を行ってきました。これらの活動がさらに発展していくよう平成20年度から助成を受けた団体の方々が活動成果などを発表し、参加者同士が地域づくりについて自由な意見交換をしていただく「助成活動発表会」を札幌市内で、令和7年12月2日に開催しています。今回の報告では、令和6年度に助成の対象となった3団体の成果の紹介や、地方の共創について意見交換を行いました。

その模様を取りまとめたので、以下に報告します。

【第1部 助成活動団体による活動報告】

「マンション管理におけるコミュニティ活動の活性化支援事業」

一般社団法人 北海道マンション管理士会

北海道の都市部において、マンションはもはや単なる「集合住宅」ではなく、地域づくりにおいて極めて大きなボリュームを占める存在であり、町内会や自治会と並び、地域の一員としての役割と責務を担っています。マンションの管理組合が内



菅野 英雄 氏

部のコミュニティを形成し、地域との連携を深めることは、地域の防災力や活性化に直結しています。

北海道マンション管理士会は、マンション管理適正化法に基づき、管理組合の運営を支援する専門家集団です。私たちの取り組みは、管理運営の根幹を支える「コミュニティ形成」の支援事業になります。

現在、道内のマンションは「建物の老朽化」と「住民の高齢化」という二つの課題に直面し、札幌市内のマンション約3,830棟のうち16%が築40年を超え、旭川市や函館市では、その割合が5割以上に達しています。さらに深刻となるのが居住者の高齢化です。特筆すべきは、道内居住者の「永住意識」の高さにあります。全国平均の約6割に対し、北海道では約7割がマンションを「^{つひ}終の^{すま}棲家」と考えています。積雪寒冷地である北海道では、除雪の負担や利便性を考え、戸建

てから都心のマンションへ住み替える高齢者も多くいるためです。

マンションの資産価値を守る修繕やルール変更には、住民の「合意形成」が不可欠ですが、役員のなり手不足や住民の無関心は、管理不全を招きかねません。この合意形成の土壌となるのがコミュニティです。

札幌市中央区は、世帯の4割以上がマンションに住んでいます。住民同士が顔見知りになり、挨拶のできる関係を築くことは、トラブル防止だけでなく、災害時の共助やスムーズな管理運営を可能とします。「良好なコミュニティが自らの財産を守る」という意識の醸成こそが、維持管理の根幹です。

2026年4月施行の改正区分所有法では、所在不明者の決議除外などの仕組みが整備されましたが、最後に管理を動かすのは居住者の意思です。私たちは「マンションのコミュニティなしに未来はない」という信念のもと、今後も支援を継続し取り組みます。

「Nチャレンジ」を活用した空知地域の活性化事業

NPO法人 北海道教育大芸術・スポーツ文化研究所

北海道教育大学岩見沢校では、芸術・スポーツビジネス専攻の教員を中心に、研究成果を社会に還元するためのNPO活動を展開しています。設立以来、「遊びと学びのコンテンツ開発」「体験環境の整備」「人材育成」



鈴木 哲平氏

を柱に、「都市型養蜂」プロジェクトや教育用カードゲームの開発など、地域特性を活かした独自の取り組みを推進してきました。

今年度、私たちが注力したのが、道の駅を拠点とした「Nチャレンジ」事業です。Nチャレンジとは、小学生を対象に開発された、アジリティ（敏捷性）を楽しく測定するための新種目で、7m×3mのスペースに設置されたコースを走り、そのタイムを計測します。コースの形状が「Nの字」であること、そして北海道の「North」の頭文字から命名されました。

最大の特徴は、高精度な光電管を用いて複合的な動作を数値化できる点です。測定時間はわずか10秒。運

動の得意不得意に関わらず、参加した児童の9割以上が「楽しかった」と回答するほど達成感が高い種目となっています。

2024年のプロジェクトでは、道内各地の「道の駅」で展開しました。

奈井江町の道の駅「ハウスヤルビ奈井江」では、芝生広場で開催し、プロバスケットボール選手によるイベントや保護者向け体力測定を併設しながら、多世代交流を実現しました。

三笠市の道の駅「三笠」では、降雪の影響を考慮し、屋内施設で実施。詳細なフィードバックを行うことで、子どもたちが自ら課題を見つけ、挑戦を繰り返す姿が見られました。

2025年も引き続き、道の駅でプロジェクトを実施しています。雨竜町・恵庭市で行い、大学生が運営をサポートし、学生自身の学びの場としても機能していました。

今後の課題は、当法人の強みである「アート」や「音楽」とスポーツをさらに融合させることだと考えています。単なる競技イベントに留まらず、芸術的要素を取り入れた包括的なプログラムを開発し、住民が「誰でも、いつでも、気軽に」参加できる持続可能な仕組みづくりを推進させていきたいと思えます。

「十勝における地域おこし協力隊の定着支援プロジェクト」

一般社団法人TCN（旧：とがち地域おこし協力隊ネットワーク）

十勝地方には現在100名を超える地域おこし協力隊が在籍しています。ミッションは観光から教育まで多岐にわたりますが、彼ら彼女らが任期終了後も地域に留まり活躍し続けるためには、スキルの可視化と強固なネットワークが不可欠です。



中田 幹悟氏

2025年3月、任意団体を法人化し「一般社団法人TCN」として新たなスタートを切りました。代表をはじめ、メンバー全員が協力隊関係者で、私たちは

「OPEN」「ACTIVE」「PROGRESSIVE」を行動指針として、協力隊人材が十勝で「生活の糧」を得られる未来を目指しています。

今回、私たちが制作したのが、パンフレット『With You With Tokachi』です。当初は24ページを想定。活動の拡大に伴い最終的には60ページとなりました。冊子の特徴は、企画から撮影、デザイン、執筆まで、すべて協力隊関係者の専門スキルを結集して制作した点にあります。

リアリティの追求では、現役・OB・OG計12名へのインタビューを通じ、移住の美談だけでなく、活動の苦労やキャリア変遷といった「生の声」を重視しました。

スキルの可視化では、誰がどのようなスキルを持っているかを明確にし、民間企業や行政からの仕事の発注に繋げる「名刺」としての機能を持たせました。

協力隊としての任期中は、行政による支援を受けて活動をしますが、卒業後の生活まで保証するものではありません。私たちは「自分たちで事業化を進める」という自律的な姿勢を重視しています。パンフレットをきっかけにお仕事の依頼をいただくなど、新たな事業展開もみられるようになりました。

今後は組織規模を拡大し、制作ノウハウを活かした収益化を図ることで、協力隊が地域に根ざすためのインフラ整備を目指し、活動を継続したいと考えています。

【第2部 意見交換】

(講演)「小さなまちで地域の誇りを糧としたまちづくりに取り組むこと」

一般社団法人 清水沢プロジェクト代表理事 佐藤 真奈美 氏
(歴史的転換点と助成事業)



佐藤 真奈美 氏

私たちは令和元年に開発協会から助成をいただき、夕張市清水沢地区を拠点として活動を続けています。申請時、夕張市石炭博物館の模擬坑道で火災が発生し、鎮火まで2週間を要するという事態が起きました。私はこれが地域の歴史的転換点にな

ると直感し、締め切り当日に申請書を書き直して提出したことを今でも鮮明に覚えています。

助成金は主に、炭鉱遺産の保存活用、地域資源の利活用、拠点となる「清水沢コミュニティゲート」の運営、そしてデジタルアーカイブ「みんなでつくる夕張の記憶ミュージアム」の構築に活用いたしました。

本日は、小さな地域でまちづくりを進めるための有効な手法である「エコミュージアム」の考え方と、地域の「誇り」をどう次世代へ引き継ぐかについてお話しさせていただきます。

(夕張の現状と清水沢地区)

夕張市はかつて石炭産業で栄え、最盛期には12万人の人口を擁しましたが、現在は約5,800人と20分の1まで減少しています。2006年の財政破綻を経て、現在は2026年度末までの借金返済を続ける財政再生団体となっています。

活動拠点である清水沢は、炭鉱開発と共に形成された地区です。かつての社宅街には風呂のない公営住宅が並び、地域の中心にある共同浴場が住民の交流を支えてきました。この浴場は残念ながら今年8月に閉鎖されましたが、炭鉱会社が建設した「生きている産業遺産」として非常に貴重な存在です。私たちはその価値を守るため、現在も市と対話を続けています。こうした歴史の厚みが、物語性のある景観や文化を形作っています。

(清水沢エコミュージアム構想)

2016年に法人化した清水沢プロジェクトの核となるのが「エコミュージアム」構想です。これは地域全体を「屋根のない博物館」と見なし、住民自身が地域の宝を見つけ、磨き、発信する仕組みです。



佐藤代表理事による講演の様子

夕張は歴史的に、炭鉱会社や行政といった「大きな力」に依存してきた側面があります。しかし、財政破綻を経て自分たちでまちを支えなければならなくなった今、住民が主役となるエコミュージアムの考え方は非常に重要だと考えています。人手が限られる中、地域の外の人々と出会い、互いに尊敬し合う関係を築きながら共にまちを作る。この環境づくりこそが私たちの役割になります。

（炭鉱遺産の活用と対話の場）

具体的な活動の一つが「旧北炭清水沢火力発電所」の活用です。空知最大級の炭鉱遺産であるこの建物は、かつて解体の危機にありましたが、2011年に開催した現代アート展をきっかけに管理者の意識が変わり、解体が停止されました。現在は「見学事業」として、一対一の対話を重視した案内を行っています。単に観光客を集めるのではなく、ここが何であったか、今後どうあるべきかを共に考える場として運営しています。

また、採炭時の捨石が積み上がった「ズリ山」の整備も15年続けています。有志で階段を設置し、毎年メンテナンスを行うことで、今では地域屈指のビュースポットとして認知されるようになりました。

（拠点の運営と次世代への継承）

2016年からは、夕張市から無償貸与された旧炭鉱住宅を「清水沢コミュニティゲート」として運営しています。ここはアーティスト・イン・レジデンスの拠点であり、表現者などが滞在制作を行う場です。また、昨年からは「夕張の記憶ミュージアムルーム」を開設し、収集した記憶をリアルに展示しています。

特筆すべきは、ここで夕張高校の生徒2名をアルバイトとして雇用している点です。資料整理や来客対応を担う彼女らは、かつて私たちが主催した子ども食堂やイベントに参加していた子どもたちです。まちづくりの現場が彼らの「仕事」になり、一緒に働く仲間になれることは、活動を続けてきた大きな喜びです。

さらに、2015年から毎月開催している「まちあるき」では、参加者が自ら資料を作って説明し始めるなど、主体的な関わりが生まれています。私たちは、ただ人を集めるのではなく、地域の尊厳を守る「門番（ゲート）」としての役割も意識しています。過度な観光化や、

無遠慮なメディアの視線から地域を守り、住む人の誇りを担保することが不可欠だからです。

（地域の誇りを糧に）

今年、私たちの取り組みは「住まいのまちなみ賞」^{※1}で全国3位の評価をいただきました。理不尽な状況に耐えてきた地域が、客観的に「褒められる」機会を作りたかったという思いから応募しました。祝賀会には、多世代の住民が集まり、地元のお菓子屋さんにケーキを作ってもらい、各テーブルに分かれ茶話会で未来を語り合いました。

小さなまちで「地域の誇り」を糧に活動するという。それは、歴史という文脈から誇れるものを見つけ出し、外の人々と尊敬し合える関係を築き、まちづくりが仕事になる姿を子どもたちに見せることだと考えています。

「地域活性化」という言葉は、縮小し続ける夕張には馴染まないかもしれません。しかし、たとえ小さくなくても、今ここにいる人たちが幸せであるための模索を止める必要はありません。これからも歴史を糧に、市民が誇りを持てる地域づくりに邁進してまいります。

【パネラーによるディスカッション】

目黒（コーディネーター：開発調査総合研究所）

本日、熱意ある活動をされている皆様のお話を聞き、地域づくりの思想・哲学として大変貴重な学びを得ました。ここからは、令和6年度の活動団体の代表者の皆様と佐藤様、さらには会場の皆様も交え意見交換を進めさせていただきます。はじめに佐藤様より第1部の活動報告について、コメントまたはご質問を伺いたいと思います。



パネラーとのディスカッションの様子

※1 住まいのまちなみ賞

一般財団法人 住宅生産振興財団が主催する「住まいのまちなみコンクール」において贈られる賞。地域住民が主体となって良好な住環境（まちなみ）を維持・管理・運営している活動を表彰し、支援する制度。

《各活動報告を深掘り》

佐藤 私自身、令和元年度に助成採択をいただきましたが、その際の活動発表会で各活動報告を聞いて感銘を受けた記憶が今も強く残っています。

まず、北海道マンション管理士会のお話について、マンションを一つの「コミュニティ」と捉える視点は、現代の地域づくりにおいて不可欠です。報告ではテキストを作成されたとのことでしたが、具体的にどのような秘訣や活動方策を盛り込まれたのか、非常に興味があるところです。

(マンションコミュニティと高齢化の現実)

菅野 テキストは、約30ページにわたり、コミュニティの形成と管理組合への寄与についてまとめています。現在、築40年を超えるマンションでは70代以上が55%を占めるなど高齢化によって、「老人の徘徊^{はいかい}」や「孤独死」が現実の問題となっています。



テキストを片手に回答する菅野氏

特に男性は退職後に地域との繋がりを失いやすく、孤独死が発生すれば資産価値にも影響します。対策として、管理人がインターホンを通じて毎日声掛けを行い、応答がなければ安否確認をする「声掛け運動」を導入している事例などを紹介しています。中には、長年親身に接してくれた管理組合に財産の一部を遺贈した独居男性の事例もあります。コミュニティこそが、これらの問題を未然に防ぐ鍵だと考えています。

テキストは、セミナー参加者に配布したため、現在は在庫がほとんどない状況です。

佐藤 北海道教育大芸術・スポーツ文化研究会の活動ですが、地域に大学がある強みを活かし、「Nチャレンジ」の統計データを研究としてどのように地域にフィードバックされていますか。

(運動データの活用と全世代への展開)

鈴木 「Nチャレンジ」は、研究ベースでスタートしています。岩見沢市内の各小学校で10年間にわたり蓄積したデータベースを基に児童が自分のタイムを過去10年のデータと比較できる仕組みです。このシステム

が運動能力向上に有用であることは、海外のジャーナルでも公開・評価されています。

今後の課題は、この楽しさを未就学児や大人、高齢者へ広げていくことです。大人が参加することでコミュニティがどう変化するのか、新たなテーマとして取り組みたいと考えています。

佐藤 一般社団法人TCNの活動において、地域おこし協力隊のマネジメントや卒業後のキャリア支援が重要なテーマで、行政との調整にご苦労も多いと推察します。自律的な姿勢で活動されている点は、非常に素晴らしく、楽しい取り組みだと感じました。

(協力隊の自立と行政との距離感)

中田 地域おこし協力隊は、行政による任用期間が終わり、「卒業後の生活の糧をいかに十勝で形成するか」を重視しています。行政に活動の周知などは行いますが、基本的に自分たちで事業化を推進しています。地域おこし協力隊の定着率を高めるには、自分たちで環境を整えることが重要だと考えています。

《フロアを交えた意見交換》

目黒 ここで、フロアからもご質問をお受けしたいと思います。

A氏 賃貸アパートでも住民同士が無関心なことや、管理会社の対応などに課題を感じることがあります。マンション管理士会が作成されたテキストは、今後「アパート版」や、ホームページによるテキストの公開を検討されてはいませんか。

菅野 賃貸と分譲では権利関係が異なりますが、共同住宅としての問題の本質は同じです。北海道マンション管理士会では、電話や面談での相談窓口を設けています。賃貸特有の契約条件なども踏まえ、お答えできる範囲で協力させていただきます。

A氏 私の父も元炭鉱マンでした。炭鉱の記憶が薄れゆく中、その子どもや孫が、今後、清水沢プロジェクトの活動協力として何かできることはありますか。

佐藤 お願いしたいのは、家族の中で語られた記憶を書き留め、どこかに託していただくことです。家族にしか言えないこと、あるいは家族だから言えないこともあります。また、写真や遺品を捨てずに残していた

だくことが、次世代へ歴史を繋ぐ最も大切な力になります。

B氏 私も地域おこし協力隊出身で、TCNの活動報告に興味深く聞かせていただきました。今後の展望として、最終的なゴールをどのように設定されていますか。

中田 ゴールは「協力隊の十勝への定着」です。やりたいことを実現できる環境を私たちが作り、それが結果として彼らの生活の糧になること。そのインフラになることが目標です。



フロアの質問に回答する中田氏

《地域における「文化・スポーツ・暮らし」の価値》

目黒 貴重な議論をありがとうございます。私からも今回の取り組みに関連したお話を伺います。

菅野様、築40年を超え耐震基準に不安があるマンションの理事長から「建て替えるべきか」と問われた際、どのように助言をされますか。

菅野 建て替えは、極めてハードルが高いのが現実です。全国的にも成功例は少なく、札幌市内では、立地条件が良く、余剰容積（さらに高く建てられる余地）がある場合に限られます。現在は一戸あたりの負担が2,000万円を超えることも珍しくありません。

我々としては「いかに長く使うか（長寿命化）」を重視します。鉄筋コンクリートは適切な修繕を行うことで100年以上持ちます。将来の解体費まで見据えた「長期マネジメント」と「ビジョン」を持つことが、最も大事なことだとお伝えしています。

目黒 鈴木様、スポーツやアートが地域コミュニティにおいて果たす可能性について伺います。

鈴木 スポーツやアートは、コミュニティづくりの「コンテンツ」です。私が地域で行っている介護予防体操には120名の高齢者が集まります。彼らの目的は運動そのもの



意見交換で回答する鈴木氏

より、「おしゃべり」や情報交換です。最近、健康をテーマに「ウェルビーイング」という言葉が使われますが、健康は、身体的・精神的・社会的健康すべてが整っていることが定義とされ、アートは特に精神的・社会的な繋がりに寄与します。人と人との繋がりに生まれる貢献可能性は非常に大きいと感じています。

目黒 中田様、地域住民との繋がりの中で、何か具体的な成功体験はありますか。

中田 清水町の有志で行った「図書館カフェ」の事例があります。地域の人が漫画やコーヒーを持ち寄り、子どもからお年寄りまでが世代を超えてボードゲームなどで遊ぶ場所となりました。そこから「次はこんな企画をしよう」と新たな繋がりも生まれています。

目黒 開催時間も終盤に近付いてきました。清水沢プロジェクトの佐藤様には、この度「住まいのまちなみ賞」を受賞されましたが、地域住民への影響や反応はいかがでしたか。



意見交換で回答する佐藤氏

佐藤 この賞は、地域の方々の長年の暮らしや営みが評価されたものです。受賞を伝えても、住民の方は「なんで？」と驚かされていました。住民の方々は、賞のために生きているわけではなく、

静かな暮らしが続いていくことが彼らにとって一番大事だからです。

行政としては、新たな街としてコンパクトにしたいと考えていますので、古い団地の暮らしが評価されたことに戸惑いがあるようです。しかし、この受賞が夕張市の歴史や文化を大切にするまちづくりのきっかけになればと思っています。新しいことをするだけでなく、今ある「小さな幸せ」を支え続ける。そのスタンスを崩さずに今後も活動が続けていきます。

目黒 「小さな幸せが続く」という言葉に、地域づくりの本質を見た気がします。本日は誠にありがとうございました。